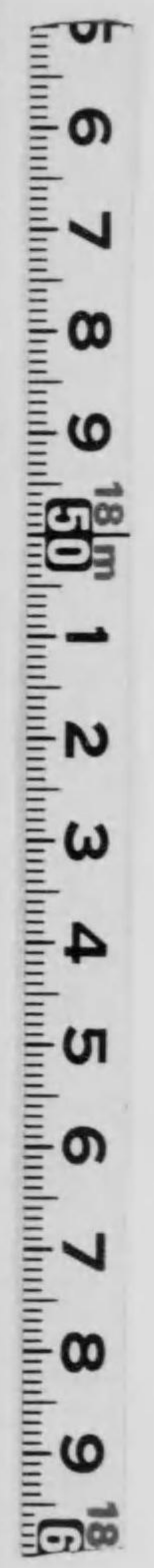


11
375

尾張の花

風



始

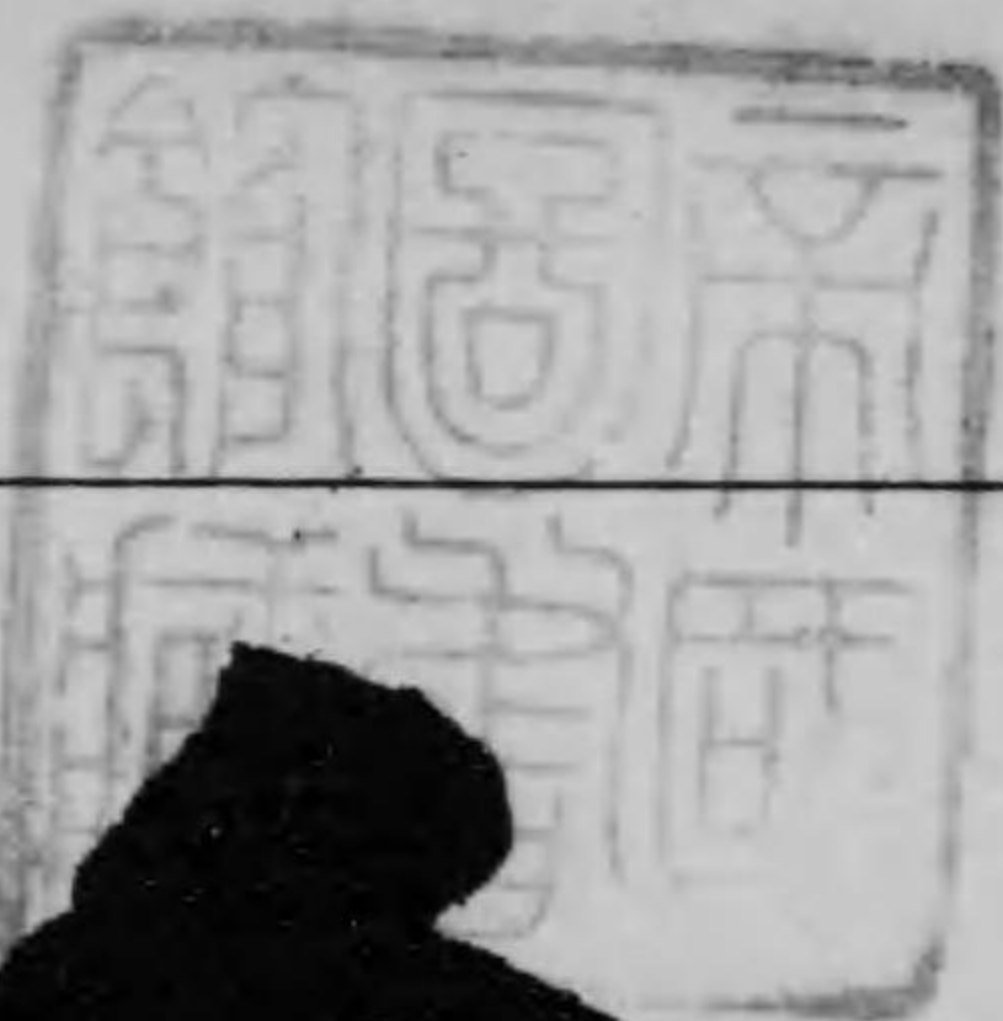


114
375

ふたりの花

西

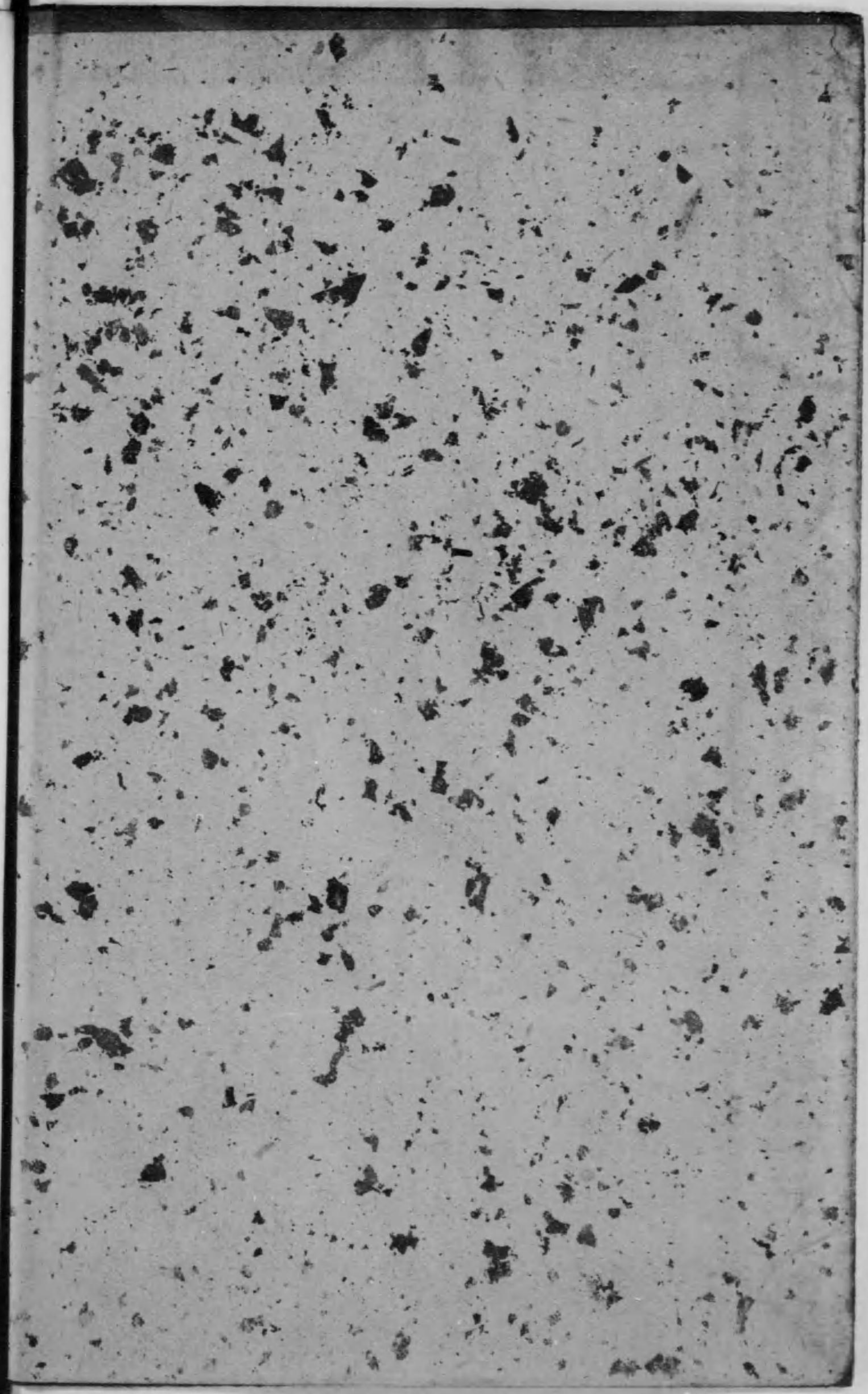
30 10.25



天
也
山

今
五
秀

大正
9.9.10
内交



数実

年以



緒言

陶祖加藤景山業を瀬戸小創りてより孫連綿其業を継承ほしく茲も七百有餘年其の間筆多の名工並に出きて名器傑作を出世しし妙なるに然れども年所の久しき是等の多くも各所小秘蔵せしめて容易に見ずし能はば事蹟傳記の如きも漸く將に散逸せんとす茲も當組合の前身より陶磁工組の頭取より刑部之痛く之を慨き明治十六年其書の編纂を企て公務の傍ら拮据事に當り調査年

此間も遂に其の業が完成し題してをりしに
 し將に上梓せんとすれども其の志が果さざりて遂に
 今も未だ當組合を之を惜みて古老の同識者に
 詢りて最に心更に歳多の改訂増補を施す之を
 外行はるに乞ひて其の編纂の願未だ遂に編者
 の切實な感謝の意を表はるるに云ふ

大正九年一月

瀬左陶磁工高同業組合

子利の花風の巻目録

加藤藤八家次印	三
三妻藤四郎景國印	三
加藤藤左衛門景長印	三
四妻藤四郎政連印	四
加藤宗右衛門春永印	五
加藤長十印	五
後白印	五
新兵衛印	五
加藤市左衛門春原印	五
加藤茂右衛門徳菴印	五
新兵衛印	五
元藏印	六
丈八印	六
友十印	六
六兵衛印	六
佐助印	六
半七印	六

金九郎印	六
治兵衛印	六
八郎次印	六
吉右衛門印	六
瀬戸印	六
鶴の班袖の茶碗印	八
加藤市左衛門景茂印	八
加藤八右衛門景次印	二
村松某所蔵の硯印	二
龍泉寺多宝堂古瓦印	二
定光寺教瓦の作人	二
加藤善右衛門景忠印	二
加藤孫九郎印	二
加藤孫右衛門印	三
加藤武右衛門印	四
加藤平吉景道印	四
加藤善平次印	四
加藤武右衛門印	四

加藤孫右衛門春福印 一四
 加藤儀兵衛景延印 一四
 加藤勘六郎印 一四
 加藤唐右衛門景高印 一五
 加藤清三郎宗清印 一五
 加藤武右衛門景高印 一五
 加藤喜平次印 一五
 加藤繁右衛門景高印 一六
 加藤善右衛門景高印 一六
 加藤慶助老後印 一六
 加藤清三郎景高印 一六
 加藤芳右衛門景高印 一六
 加藤勝助印 一六
 加藤善治印 一六
 室曆天明年間陶工印 一七
 織部鯛形四郎印 一七
 嘉永政事陶工印 一七
 尾州藩陶工其印 一七

加藤春二郎印 一七
 磁祖氏去印 一八
 埴仙堂印 一八
 寺尾市四郎印 一八
 貞陶園印 一九
 川本伊六郎印 一九
 加藤新九郎印 一九
 松籟園印 一九
 加藤清兵衛印 一九
 陶玉園印 二〇
 現時製磁家印 二〇
 窯印 赤津印 二三
 加藤仁兵衛景典印 二三
 山口孫三郎月窓印 二三
 加藤太兵衛印 二四
 加藤唐三郎景久印 二四
 加藤作助印 二五
 加藤忠助印 二五
 山口佐十郎印 二五

加藤梅冬郎今春成印 二五
 加藤唐三郎景風印 二六
 加藤作助景義印 二六
 加藤唐三郎景在印 二六
 加藤景胤印 二六
 加藤小三郎印 二六
 加藤金太郎印 二六
 品野印 二七
 加藤定藏印 二七
 加藤吉三郎印 二七
 嘉永政事陶工印 二七
 加藤海助印 二七
 加藤五郎八郎印 二七
 加藤孫右衛門印 二八
 加藤源兵衛印 二八
 加藤春花印 二八
 加藤五郎八郎印 二八
 美濃印 二八
 久尻印 二八

洲工匠印 三〇
 御深井及萩山印 三〇
 九郎印 三一
 文京印 三一
 見心印 三一
 伯就印 三一
 正本印 三一
 宗玄印 三三
 曲全印 三四
 蝸牛印 三四
 数也印 三五
 自敬軒印 三五
 風送印 三五
 太郎菴印 三六
 喜樂印 三六
 昇菴印 三六
 正三燒印 三七
 蓮也印 三七
 金谷印 三七

陶祖春慶翁之陶碑



日潤室印	三六
無功菴室印	三六
廬山室印	三六
士朗室印	三九
退甫室印	三九
子日菴室印	三九
梅翁室印	四〇
政石室印	四〇
微笑尼室印	四〇
剛甫室印	四一
好山室印	四一
潤又右衛門室印	四一
丈久保郢也室印	四一
如水室印	四二
一樂室印	四二
久野助九郎室印	四二
間適齋室印	四二
龍門室印	四三
龜屋喜八室印	四三

馬場多喜助室印

楓久太郎室印	四三
山本道傳室印	四三
甄翁室印	四四
尊壽院室印	四四
慈明室印	四四
爲足菴室印	四五
長翁室印	四五
秋二室印	四六
素室室印	四六
小寺有齊室印	四六
若田鹿助室印	四七
祐昌室印	四七
國枝重輔室印	四七
松平東亭室印	四七
作者未詳之室印	四八

花月之卷目録終

陶祖春慶翁之碑文

陶祖姓藤原名景正稱加藤四郎左衛門別號春慶又曰俊慶
追稱曰陶祖其王父曰橘和貞大和諸輪莊道蔭村人也和貞
生元安元安生陶祖元安有罪謫備前裕等尾母子氏山城深
草人遺風以女也陶祖幼時喜埴埴造土器恆恨其巧不如殊
邦有往學之志既長仕大納言久我通親叙五位諸大夫遂從
通親之第二子僧道元入宋時適波嘉定十六年也留學者凡
六年而歸卸帆於肥後川尻乃以所齋歸土造小壺三具於舶
且呈副帥此條時賴與道元後海內傳以爲奇珍陶祖歸時率
此六因省父於謫所遂留陶焉尋侍母於深草無幾何母沒乃
試陶於京畿及傍近諸州又試之於本州知多愛和二郡皆不
可遂來本州山田郡瀨戶村觀祖母懷之地而奇之曰地勢向

陽山高水清其土質亦與所齋歸者無異遂開業於斯終身不
復他徙云或曰陶祖祖母得佳士於瀨戶雨池洞懷之以歸謂
之祖母懷一曰祖母懷陶祖所以祈瀨戶村神社深川神夢得
也瀨戶村古隸山田郡今并之春日并郡莖且在宜陶地也按
日本後紀延喜式祀名鈔朝野群載等書當時朝廷徵瓷器於
本州必於斯郡降及陶祖亦聞知既往之事跡故易爲功云陶
祖宅趾曰中島在瀨戶村深川神社東邊田甫中樹杉一株以
爲誌又其地有祢禪長菴之地傳陶祖晚年委家事於其男陶
祖於菴妻於宅地各自卜築以爲終焉之地陶祖沒年諸書無
所考墓曰五位塚在村左右窠稱馬城地今其手造把握者不
被遺於本土俱村社簾鎮獅子一雙傳以爲其手造也亦亡其
偏村民姓藤者皆其裔也其立其祠曰陶彦社又名窠神例祭

以三八月十九日三月戲獅八月走馬子藤五郎孫鬼四郎以下在先業傳曰九功之德皆可歌謂之九歌陶祖者一於此蓋歌以勸之俾勿壞載歌曰

公昔浮海入混茫天倪何遠認津梁
 若馮夷交護送蛟龍
 龜鼉况敢妨留學暫時技出藍
 一朝揖謝言歸航蓬壺瀛洲
 取次過帆腹果然百尺檣魚眼射波路
 萬里鰲背立國壽靈
 長歸來桑梓共無恙孝子遠遊自香方
 就養無憾彼與此天涯之適聚幾糧
 所在試盡土質性嶮岨艱難亦備嘗
 後到山田古陶郡山高水清地向陽
 樂土在居子孫業好埴夢得祖
 母藏遂令天下後在人喚陶必以瀨
 戶鄉九功之德就可歌
 利用遺澤偏扶桑
 慶應二年丙寅二月尾張阿部伯耆撰

窯 印 瀨戶窯

如藤藤八家次作也此「カ」ナケ「樂」と云ふ古瀨戶釉
 肩つきの茶入に(家次ハ二五藤四郎)
(基通の家)

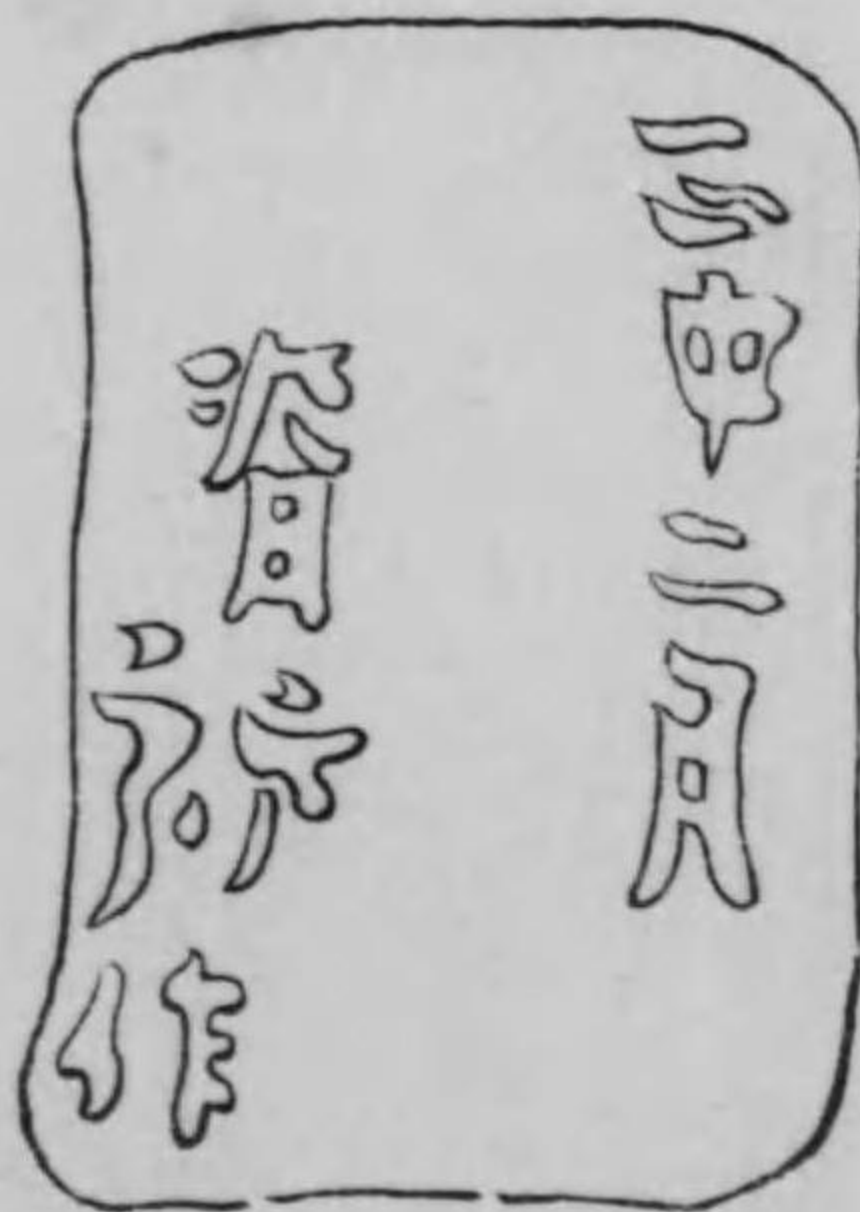


三土藤四郎景國作古瀨戶釉の茶入

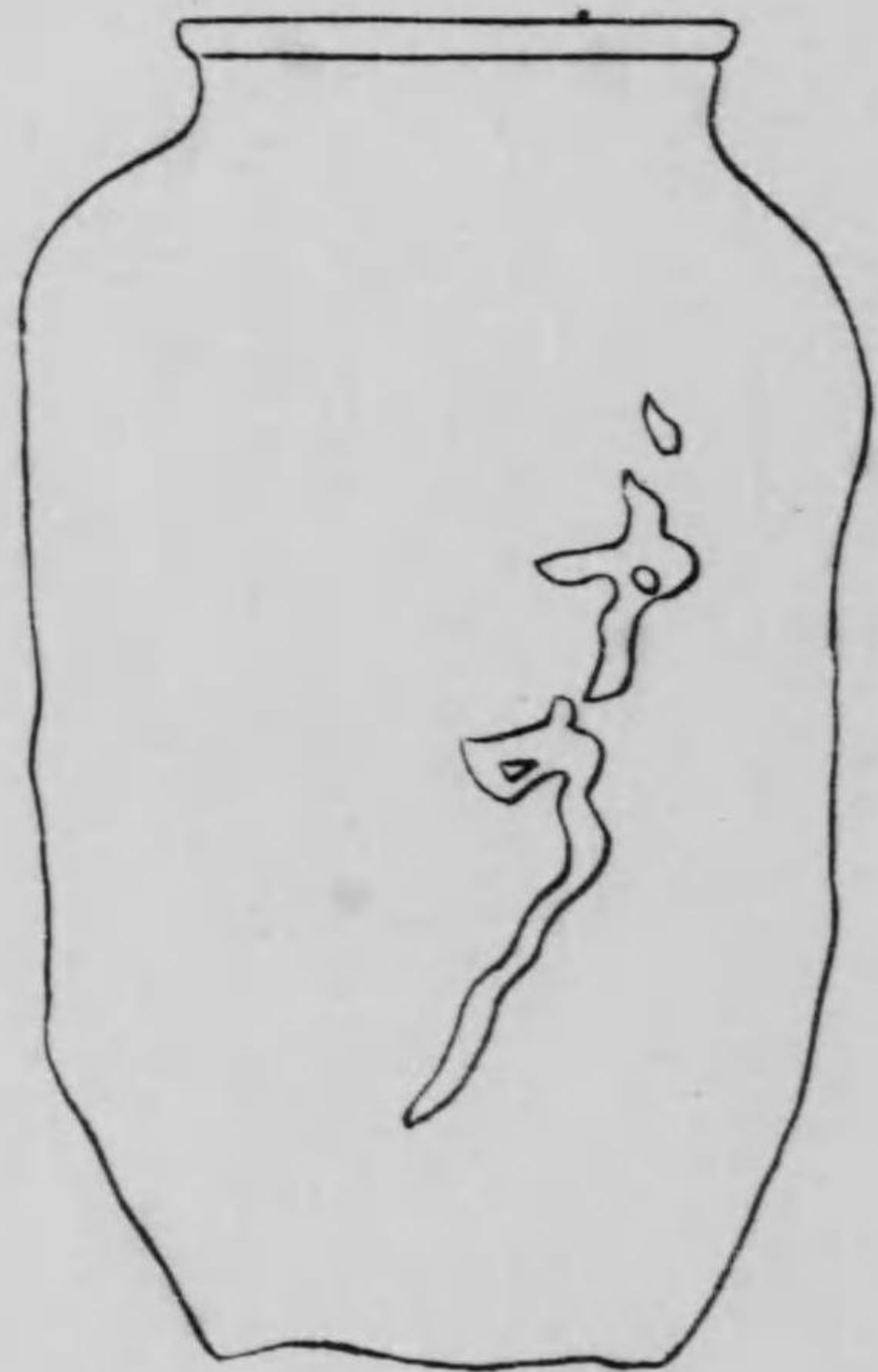
但し華挿ハ千和休に〜て圖の如し



加藤藤左衛門景長
獅子の遺物
(三子藤四郎景國の弟)作



四世藤四郎政連の作破風窓の茶入



又同人作の葉茶壺に左の印
胡桃印或ハ鬼面印と稱
一説に此胡桃印ハ慶長藤四郎
の作と言傳ふ其蓋の外側
留所所破風狀に

地質を露したるハ四世政連の作に終る



茶壺の底

寺人の瀬戸六作と稱すはハ永禄六年某月織田信長瀬戸に表して六人の在工を撰こしとのにて各製品に左の印代記凡

加藤宗石御門

春永と野



加藤長十



俊白 一口宗伯



新兵衛



風五

加藤市左衛門
春學と跡を

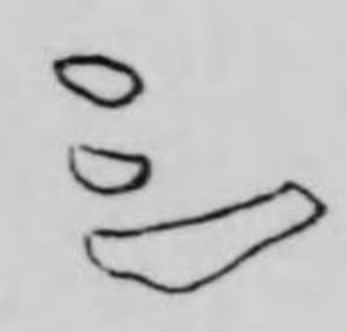


加藤茂右衛門

徳巻と跡を



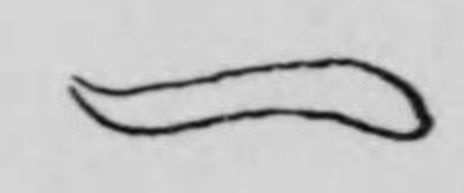
瀬戸六作の一人新兵衛ハ下印の外別に左の印を
用ゐしとのあき



力新

吾人の瀬戸十作と稱するは天正拾三年某月古田
織部正重然(重勝)瀬戸以来として十人の名工を撰
しものにして各数品に左の印代款せり

元藏



丈



丈

十



六兵衛

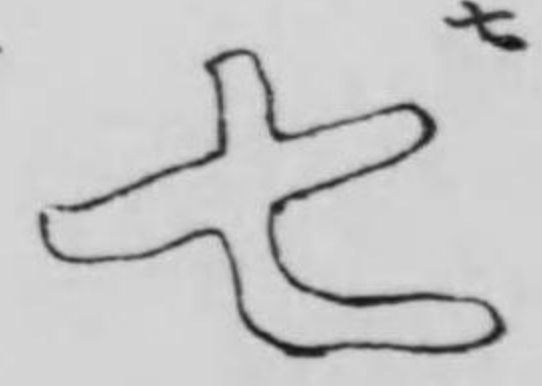


依
初

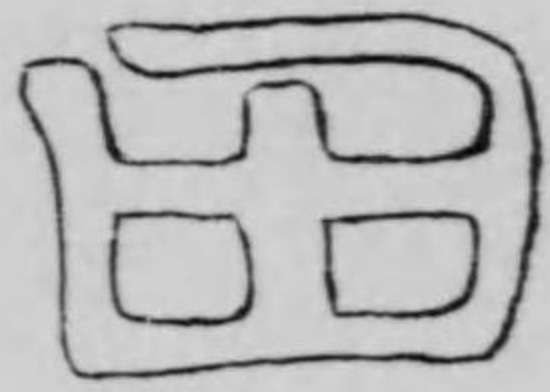


半

七



金九郎



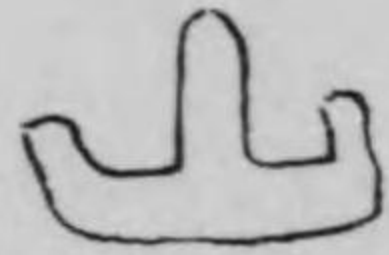
治兵衛



八郎次



吉右衛門



瀬戸窯或ハ赤津品野窯の陶器に左の印を数一に
はものあり其作工に種々の説ありて詳ふ

らぎき共永禄慶長年間之作事と言傳ふ

茶入に

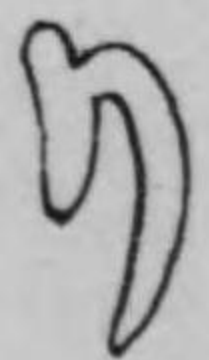


一作
一に道味

茶入に



茶入に

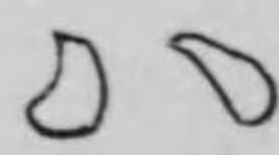


茶入或ハ茶碗に



一作
一に江存

茶入に



茶入に



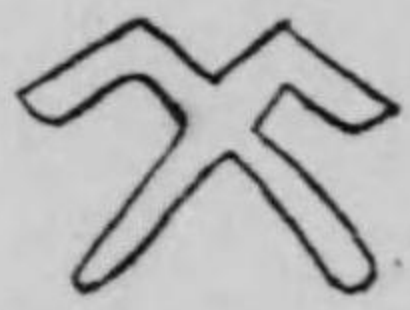
茶入に



茶入に



当形茶碗に



一に道祐
作

今茶碗に



一に正意
作

当形茶碗に



今茶碗或ハ茶入に



当形茶碗に



今茶碗に



瀬戸古窯の疏よと堀出たりは鶴の斑軸を施せば
最も時代古き茶碗に左の印次第一に正意のあそ
其作者明かふらざれば其亦尋常の物に非ざらん

形名

景正王

永禄天正年間、陶工加藤市左衛門景茂の作す
益ハ多く左の印を歎也

春厚

二升入茶壺の底に

天正六年
正月
徳島
上

同時代二升入茶壺の底に

和
州
徳
島
上

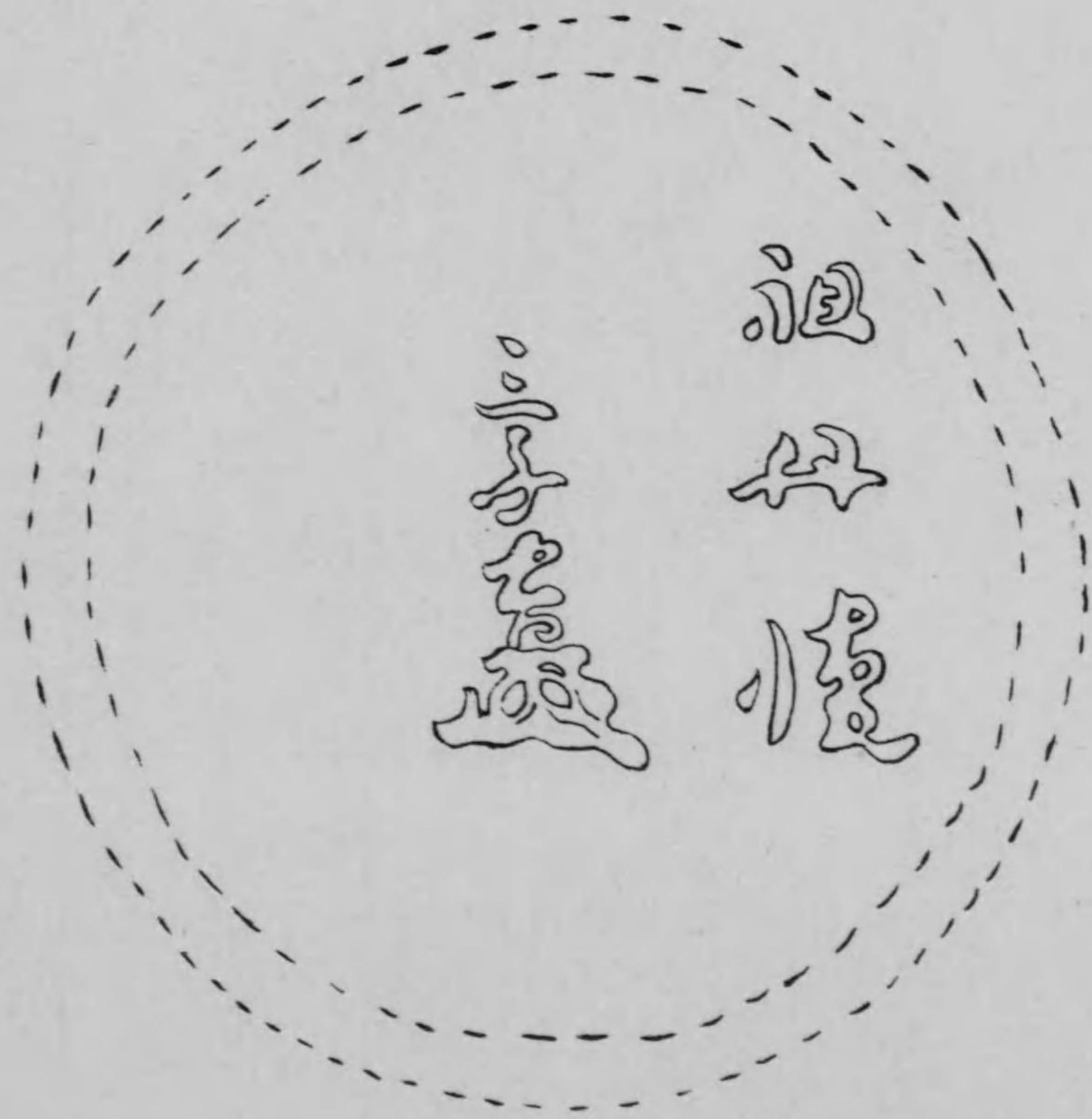
同時代二升入茶壺
の底に

和
州
徳
島
上

同時代二升入の底に

和
州
徳
島
上

同時代二介入
茶壺の底に



同時代二介入茶壺の
底に



同時代古瀬戸細鎌倉
彫風の模様おは扇面
形の香合に



竹入茶壺の底に



慶長年間の陶工加藤八右衛門景次の作と云ふ
く左の印は歟

景次作彫名

景次

元和年間の作と言傳へて名古屋の人村松某氏の所
藏織部の硯に



尾州東春日井郡吉根村天台宗龍泉寺多宝堂に用

ゆー黄瀬戸釉の古瓦に

子寄色女立也

安三 二月十日

乃瀬戸村加茂特助記

慶世年中今郡皆概村定光寺の敷元を製したは陶
工ハ左の敷人にして毎片各其名或ハ印を敷凡
瀬戸村

加藤金三郎

加藤善九郎

加藤久八郎

加藤善四郎

加藤善右衛門

加藤長兵衛

加藤善太郎

加藤孫右衛門

加藤忠老衛門

加藤作助

加藤源重郎

加藤權三郎

赤津村

加藤長次郎

加藤唐三郎

加藤仁兵衛

加藤太兵衛

加藤忠右衛門

品野村

加藤新右衛門の家筋

加藤三右衛門の家筋

以上

慶安寛文年間の陶工加藤善左衛門景忠作古瀬戸
 袖の水指



宝永年間の陶工加藤孫九郎の作と一器とハ多く左
 の数あり



同時代の陶工加藤孫右衛門の作と一器とハ多く左
 の印を数に

春琳

神酒壺の底に



神酒壺に 作者不詳
 陶祖景正作高麗物に類以の釉色にして頗る高
 尚の作



宝曆年の陶工加藤武右衛門の作と一器ハ多く左
 の印を欸に

春曉

春曉

春曉

同時代の陶工加藤平吉景道の作と一器に

景道

明和年間の陶工加藤喜平治の作と一器に

春山

安永天明年間に加藤武右衛門(春曉)の作と一器ハ

多く左の印を数見

春宇



同時代の陶工加藤孫右衛門春福の作と一器ハ多
く左の印を数見

春丹



天明年間陶工加藤儀兵衛景純の作と一器ハ

景純

寛政文化年間盛に製出せし加藤基六と称する陶

工の作と一器ハ多く左の印を数見

景純



の晩年印

同時代の陶工加藤唐左衛門の作と一器ハ

唐

大小あり

秋慶

御焼物師加藤唐左衛門藤原高景作

同時代の陶工加藤吉右衛門景高(磁祖氏吉)の作と一
器ハ

景高

寛政天保年間にの陶工加藤清三郎宗清の作と一器



文化天保年間盛に製出せし加藤武右衛門(孝守)と
稱すは陶工の作と一器に



同時代の陶工加藤喜平治の作と一器に



同時代の陶工加藤繁右衛門の作と一器に



同時代の陶工加藤善右衛門の作と一器に



早梅亭
造

天保嘉永年間盛に製出せし加藤慶那右後身茶器
を數一左の印が数も廣助ハ楳譜を能くしたる



嘉永年間盛に製せし陶工加藤清三郎(宗清)の作
と云ふに

宗晴

同時代の陶工加藤芳太郎の作と云ふに

芳春

嘉永安政年間の陶工加藤勝助の作と云ふに

春永

弘化安政年間盛に製せし加藤善治(早稲亭)の
後の

製樂として作せし器に

春善

彫名

二世弘法

古瀬戸及び志野織部等の釉技法は左の
印或類したはあり其作者年層詳ならずは皆指
頭の作にして空曆天明年間の陶工と云ふ

春貞

春吉

春宗

春水

春茂

春興

織部網形の皿に左の印を載したはあり其作者年
層詳ならずは其天保嘉永年間の陶工と云ふ

入道 芳春

八世春正

茶器及び雜器に在の印は、類せしむるあり其作者年層
ハ詳ならずとも其嘉永安政年間ハ陶工五里と言ふ

慶山

慶山

小山

織部細の茶碗に在の印を数せしむるあり其作者年層
詳ならずとも嘉永頃ハ作と言ふ
一に曰尾州藩岡宮某ハ作とあり

六郎

現時の陶工加藤春二ハ其作一に数に在の印を数
中然も其意に通ハざるは器に此印を用ふは事少一

〇

徳川候爵より
受領の印

作里流石ニ送

磁器蓋印 瀬戸窯

磁祖加藤民吉造は文の製品に在の印を数に

尾張

文化元年に尾州家
より下賜の木印

尾張

尾州家勅定奉行
より下附の印

五

享和
尾張
年製

文化
年製

尾張

文化
尾製

張

保賢

瀬戸民吉
寫之五

此印ハ多く祥瑞模様の
器に用之

尾張
官製



埴仙堂川本治兵衛ハ其作品に左の印が款として然
 一と意に通ハざは極ハ悉く破砕して放抛せし時
 人之を拾ひ集め合せて賞玩せしもの亦至に夥
 からん

勉陶園

其印は年の時
 にして所産を



埴仙堂製

祥學

寺尾市四郎ハ文政年中尾張國春日井郡大森村に
 生れ後埴仙堂治兵衛に從ひて業を受け安政年中
 江州彦根井伊家に聘せらるる其庭焼に從事す依て

と數年不々晩年井伊家を辭し歸りて尾州愛知郡
 川名村の陶窯に就き錦糸の磁器を製し左の印が
 款に

五 朗

真陶園川本半助ハ悉々製品に左の印が款に

半 山

和代半助
 江年の印



真陶園製

文政天保年間の工人川本伊六ハ埴仙堂及び初代
 真陶園の門に入ると業を受け後遂に師に劣らさ
 依名工とよき其製品に左の印を款に

糸 樂

品

天保嘉永年間の工人加藤新九郎其製も亦磁器に
祖母懐と云ふ印を敷いたる一不國守尾州家の傳
止は亦此と云ふ後左の印に改正

祖母懐

祖母懐

祖母懐

裕籬園加藤健十作里一器に左の印を敷は

けん十

同加藤清兵衛(けん十)の作里一器に左の印を敷は

清瓶

陶玉園(代初)加藤五助の作里一器に左の印を敷
は

陶玉 陶玉園
精製 園製 五助製

其他現時の製磁家中著名の者其製品の落款左の
如し

奇陶軒製ハ 川本村吉

蓬萊軒製ハ後ハ 加藤左左衛門
陶樂園と改正

還情園製ハ 加藤紋右衛門

千峰園製ハ 伊藤四郎左衛門

白雲堂製ハ

加藤用兵衛

陶玉園製ハ

加藤五助(當代別)

原泉堂製ハ

川本惣吉

山光製ハ

加藤光左郎

水魚園製ハ

水野庄左衛門

石華園製ハ

川本利吉

山陶園製ハ

川本留助

松籟軒製ハ

加藤村三郎

早梅亭製ハ

加藤善次郎

青華園製ハ

加藤五郎兵衛

清榮軒製ハ

加藤繁十

松巖堂製ハ

加藤正三郎

扶桑軒製ハ

加藤國太郎

奪色園製ハ

高島金次郎

舜耕園製ハ

加藤祐右衛門

香山製八

小崎香山

春光製八

加藤春光

陶廣園製八

伊藤安七

陶情園製八

高島末松

真玉園製八

加藤松次郎

古陶園製八

伊藤伊平

古陶軒製八

加藤吉兵衛

精陶園製八

高島戀三郎

大櫻軒製八

高島宗四郎

宗榮軒製八

高島兼太郎

真昇園製八

加藤進二

錦峰園製八

加藤三右衛門

新葉園製八

加藤新三郎

柏山製八

高島竹次郎

送化園製八

伊藤宗五郎

成功園製八

近藤錢左郎

梅花 製ハ 加藤 梅花

麦袋 製ハ 加藤 友五郎

香雪園 製ハ 加藤 國吉郎

精實園 製ハ 水野 義忠

久々 製ハ 加藤 平兵衛

赤津窓

加藤仁兵衛景典の作也一窓に左の歌ありと言傳
不然と其其歌世に稀なり

春山

何世の加藤仁兵衛不伝其ハ詳ならずも左の
印と歌せしむるあり

仁心

山口孫三郎月窓の家祖ハ山口清ハ郎と稱し尾張
國愛知郡山口村に生は長しして后三河國加茂郡ハ

草の城主某に仕へた也
 二五清十郎ハ始淺野紀伊守に仕へし故あり後
 福島左衛門大支正則に勤仕を然不豊臣秀吉征
 韓の大志ありを早き福島家を辞し名を長右衛門
 と改光加藤左馬次に從ひ渡韓して功あり凱陣帰
 朝後辞して尾張國赤津村に居る也
 三五内匠ハ尾州清須の城主松平薩广守忠吉に仕
 へ晚年辞して赤津村に歸り退隱也
 四五八長右衛門と稱し赤津村に仕る也
 五五長右衛門重定ハ元禄ハ安年尾州家法山廻從
 を命せり是赤津村に在り之に從事を後事三拾六
 年にして享保十五年職を辭し退隱して名改幸
 彦と改む是上里孫三郎月窓ハ四五の孫也是とも
 四五重定爾來家系數派に分るも陶業に純きし年曆

詳ふらさき共孫三郎ハ寛政文化年間の陶工に
 て姓風流を好む人なり故に其作器亦雅致に富
 む多し左の印或款ありたり

月窓



文化天保年間の陶工加藤太兵衛裝玉本器に左の
 印を款に

四郎 春一

文政嘉永年間の陶工加藤唐三郎景久其作器に
 左の印を款に

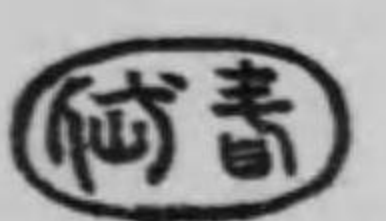
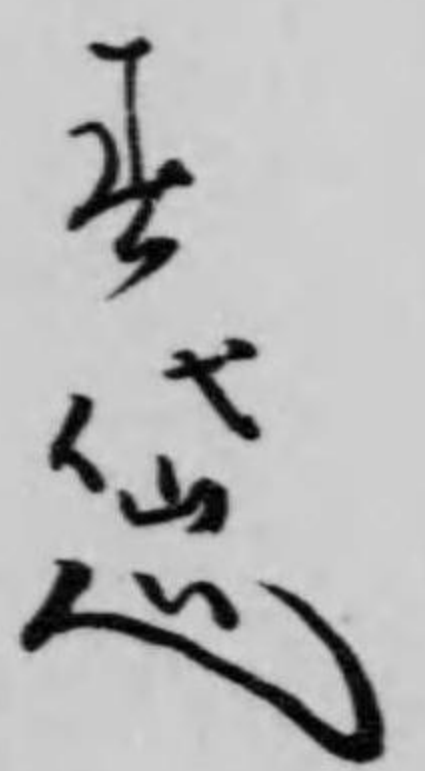
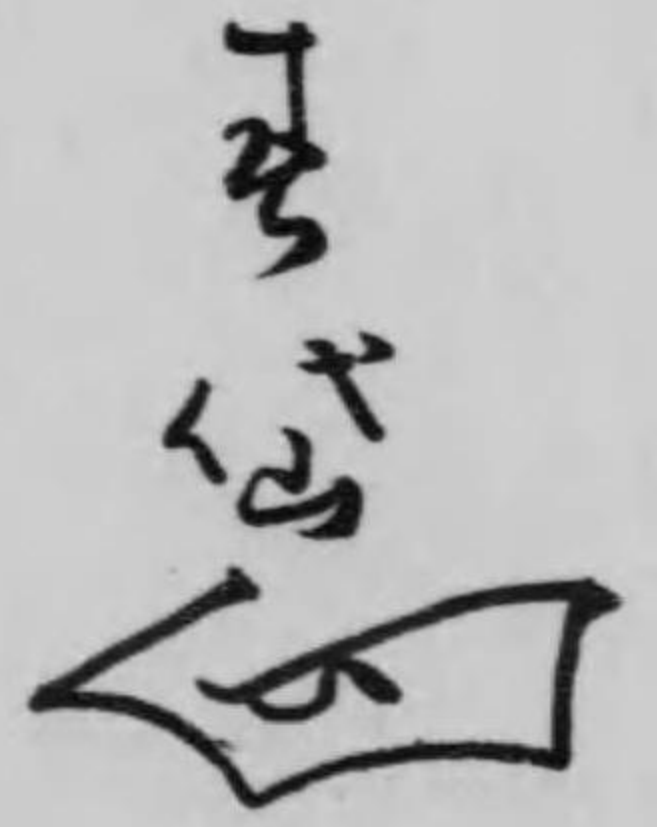
春龍



春龍

晩年の印

天保以後明治年間の陶工加藤宗四郎（住仁兵衛）春徳
 八造りて器に左の印を数行



濃州今尾に於て製したは器ハ



尾州川名に於て製したは磁器ハ



同時代の陶工加藤作中ハ其作り器に左の印
 類ハ



晩年



同時代の陶工加藤忠吉ハ特に動物類の遺物を製
 する事に長し赤津窯に於ける名手の一人なり其
 製したは器ハ左の印に数行



同時代の陶工山口佐十(月窓)ハ其作里一器に左の印を数れ

佐十

安政慶應年間の陶工加藤梅太郎の作里一器に左の印を数れ

附言同工ハ春徳の長男光太郎没後伐継ぎ尾川
家之法窯屋を相續せり故に前代の器に今の一
字を冒し今春徳と稱したる

今春徳

明治の初年に盛に製せし陶工加藤唐三郎景風(春徳の長男)ハ其作里一器に左の印を数れ

春賢

現時の陶工加藤作如景義(春徳の長男)ハ始如春徳と稱し
たも其後其器を第小三郎に譲り未製品に左の
印を数れ

作如

景義

現時の陶工加藤唐三郎景在(春徳)ハ其作里一器に

唐伴

と

現時の陶工加藤文助景胤ハ其作リ一器に

嘉山

嘉山

嘉山

現時の陶工加藤小三郎ハ其作リ一器に

春逸

現時の陶工加藤金太郎ハ其作リ一器に

春梅

品野窯

文化天保年間の陶工加藤定藏ハ其作リ一器に左
の印が歟に

史也

天保嘉永年間の陶工加藤吉三郎ハ其作リ一器に
左の印が歟に

品吉

品吉

織部手鉢に左の印を歟一たはあ其作者年昏
詳ならずはも嘉永安政年間の陶工不足と言ふ

春聴

嘉永安政年間の陶工加藤海助ハ其作り一器に左
の印を数り

春花

明治の初年に盛に数出せし陶工加藤五郎八と云
一休者ハ其作り一器に左の印を数り
附言五郎八ハ始富士太郎と称し品吉の長男に
して赤津黨の良工春徳の教育を受け雅作の名
手ふり明治三十三年某月没り

五八

同時代の陶工加藤弥藤治(品吉の次男)ハ其作り一器に左
の印を数り

陶工

現時の陶工加藤源兵衛ハ其製品に左の印を数り

山古

現時の陶工加藤春礼ハ(海助の次男)其製品に左の印を数り

春花

春花

現時の陶工加藤五郎八ハ其作り一器に左の印を数り

永樂

美濃窯

久尾窯法紙釉二斤入の茶壺に

底

文祿年製

三月日

上祖母懐也

同窯古瀬戸釉一重口大水指に

文祿三年三月

九月

濃の明土法製久尾窯村

可也

是作也

同室古瀬戸袖二竹入の茶壺に

筑後守

七代目

景光作

印中不詳

非工匠之部

尾州徳川家代々法深井窯及ひ萩山窯等の庭焼に於て自製の陶器に

元友斎

あ 友

齋朝彦

あ

齋莊侯

八

金城主人

壺其

あ

友

萩山

の印

金城東山

の印

赤山

東山室の印

租母懐

齊莊侯の時
小納戸後の
管理の印



賞賜

慶應年に之が
用られたる故あ
るて直に康尼

租母懐

不作
不詳

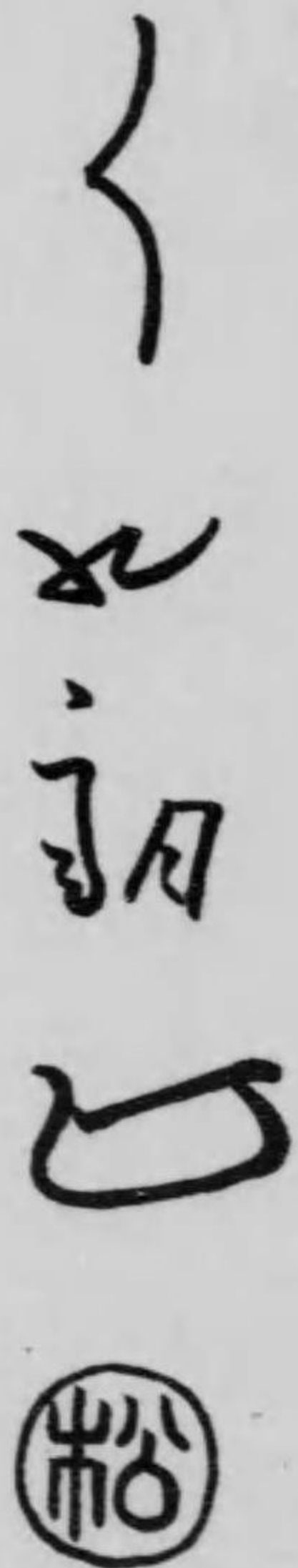
租母心

不作
不詳

九朗

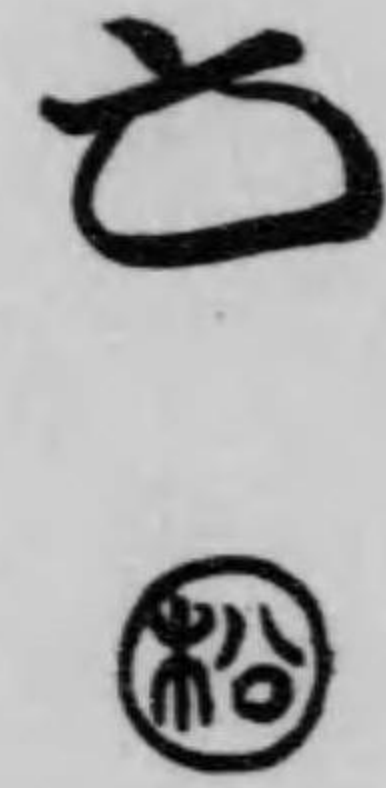
九朗ハ尾張の臣平沢清九郎と通称し

今昔菴と稱し安永元年に生きたる人なり性製陶
好みて頗妙域に至る勤仕の余暇常に茶事又
製陶を嫖む其作る家の器ハ多く瀬戸窯の古法
に倣ふと云へ共間々唐津南壘等を模したる器
あり皆工人の風ふく雅致に富み頗る上好なり
吾人之を稱して九朗焼と呼び又九朗窯といふ
其作する每器に左の如き符あり



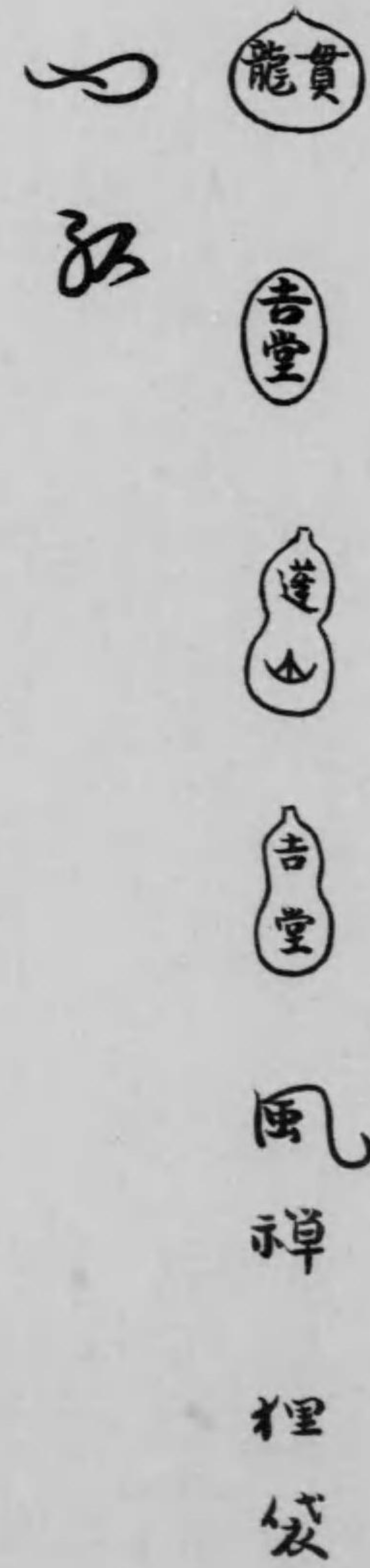
九郎 二代目 九郎ハ通称九郎と呼ぶ亦公菴松柏又

養元園朗岳と稱して茶事に名あり父九朗の法に倣ひ陶器を作る其枝父に劣らば甚高難にて器に左の符を敷き



文京

文京ハ姓を香西(正木)と稱し運術我業と以天明年間の人あり常に今古の陶法に倣ひて各種の茶器製造然も其己か意に適せざる器ハ人之を乞ふも譲與せざりしと云ふ故に其に傳ふるものハ皆雅致に富み頗る高逸にして更に工人の風不



見心 見心ハ尾州の臣にして通称枚山と云ふ寛政年間の人なり文武の道を兼備し大に其

右あり又茶道に明にして勤仕の余暇娛樂の爲に陶器を作る其作る器の器ハ專點茶器にて皆高韵脱俗なり器の裏面に左の如き印あり見心ハ唯自家の用に供する爲めに作し以て多く世に傳へんと云ふ



蘭谷

伯

乾

又白壽

伯

乾

ハ

尾

張

の

臣

千

村

総

吉

と

称

一

寛

政

年間の人にして大觀堂又自適園諸成篁沢等の

跡あり詩書画を善し茶道に精くして韻名あり

勤任の余暇陶器を作し瀬戸窯に於て焼ありむ

其作皆上好にして工人も及みざる妙技ありむ

に左の符を捺す



正

木

正木ハ尾州の臣正木宗三郎(晩年宗三)と

通称モ寛政年間の人ならず壯年の頃より製陶を
好して其妙に入まじ勤仕の余暇器物を造り瀬
戸窯及浅深井窯に於て焼かむ其作皆雅致高尚
にして吾人甚之を賞し正木焼と呼ぶ每器左の
印あり今世に初代正木と稱し賞玩もるもの皆
其人の作あり
又尾州愛知郡星崎と云ふ里の土を以て作し
器あり此ふハ特に星崎の印を數り



正木

星崎の土を以て作す一器



正木 二代目 二代目正木ハ始め半次郎と呼び嘉永

幸尚の人あは後尾張前大納言茂榮侯の小納戸
 彼に進み名を伊織と改む少時より製陶の技に
 妙にして勤仕の余暇極めて細密なる香合或ハ
 遺物の類を作る皆左の印あり其作皆巧妙に
 且俗氣なく父宗三郎の作に比して其意匠異
 なるも更に一層の妙あり時人称賛して其作代
 望むと雖も唯勤仕の余暇自家の娯樂の業なき
 ハ其益亦甚多からん

正市

宗

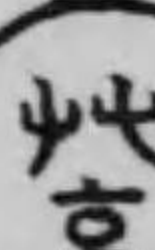
玄

宗玄ハ渡邊兵庫頭と称す尾州の光職
 たり天保年間にて退隱蓬髪して宗玄と号し名古
 屋大曾根芝山莊に住し後尾頭の里に一菴設

け又日菴と称し此に移り専ら茶事を以て光後
 の樂と号し又樂焼に類する陶器を作し左の印以
 致して其作皆高尚にして頗る雅致に富む安
 人樂焼本堂の器に優ると称す



玄



樂々軒

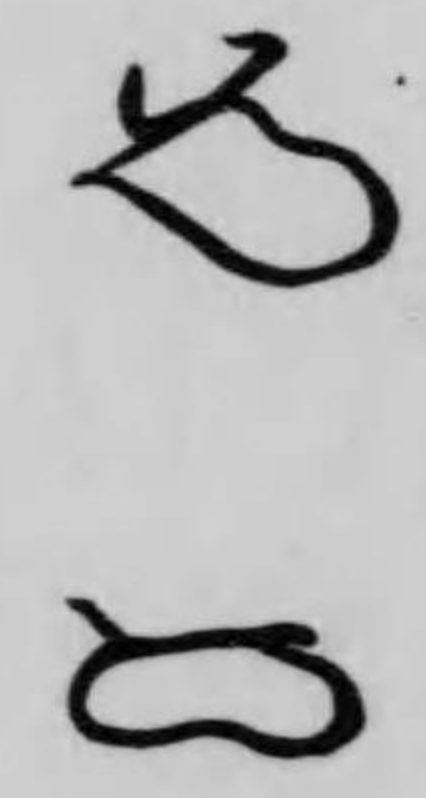
山
 玄
 知

曲

全

曲全ハ通称を天満屋丸兵衛と云ひ川
 邑廣宗と称し尾州名古屋の人なり常に茶事を
 好む曲全斎又沙春菴等の號あり寛政年間遠に

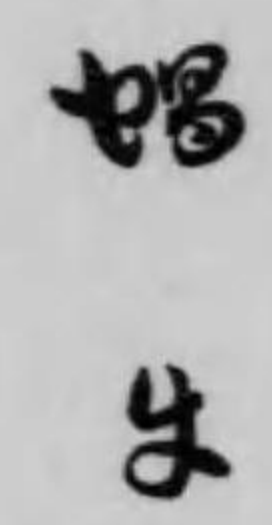
茶道の一流を興し曲全流といひ又稱々雅致の陶器を作る喜器に左の印あり



蝸

牛

蝸牛ハ曲全の男にして通称又天満屋九兵衛と呼ぶ玉春斎正貞と并に父曲全の後以襲ひ曲全流の茶道を傳ふ間々陶器を作る其器左の印或彫り



数

也

数也ハ尾州の明人なり尾州に仕ふ爾時國字彼に平尾の姓或賜ふ依て平尾数也吉章

と稱して滋数奇屋役を暫めたり常に茶事或好きて遂に其名或得て心空菴と號し自ら娛樂の爲に陶器を作し左の符或彫り其器甚上好にて雅致に富先且並に之を初代数也と稱す



数

也

二代目

数

也亦父に劣らざる茶人にして青雷菴と號し尾州の茶道役を勤む勤仕の余暇自ら種々の陶器或作り多く左の印或彫り其作皆上好にして大に並に賞玩せらる



自敬軒

自敬軒ハ山本若右衛門と稱し尾州の臣にして宝暦年間の人なり勤仕之余暇自ら娯樂の爲め陶器を作し左の印を捺し其作頗る奇にして又亦上好なり

自敬軒 宗政氏

鳳造

鳳造ハ尾州の臣市江鯉右衛門と稱し文化文政年間の人なり壯年より製陶が好む勤仕之余暇陶法が平沢九朗に學び茶器又雜器を作し其作九朗に似て工人の風なく皆上好にして喜雅致に富む時人々に愛玩せし毎器に左の印を捺し

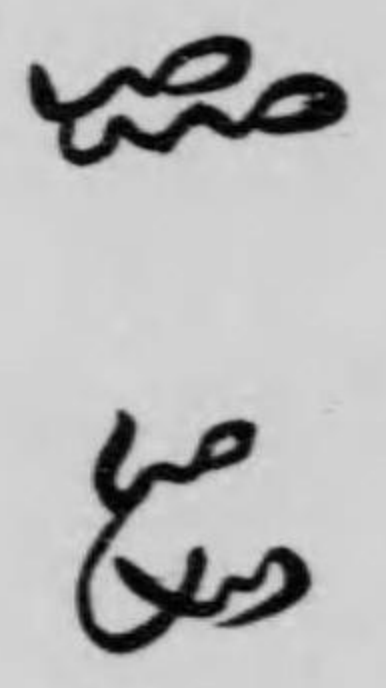


鳳造

梨亭

太郎卷

太郎卷ハ尾州名古屋の人高田榮治(最下屋と)と稱し後良齊と改む少年の時より畫が善く又茶道を由全齊及び十村伯就に學び遂に其名を得たる文化年間の人なり間々雅致ある陶器を作し左の符を彫り退隱して惟然と稱し朴蕙瓶と號し



喜樂

喜樂ハ尾州の臣飯田ハ三部(一ハ部)と称
一文化年間の人不_レ仕勤仕の余暇茶事(三ハ部)を好_レて
又自ら樂として陶器ヲ作_ル其器皆奇韻に富_メ
里時人之欣賞一乞ふと乞ふ_ニ其意に適ハざる器
ハ曾て讓與せ_レんと云ふ其作品に左の名を彫_レ

布衣堂 俊民 喜樂 キホ

昇菴

昇菴(或時少菴と書ク)ハ尾州名古屋の人不_レ
茶事を好_ミて其名あ_リ里時に或ハ陶器を作_リ
下庄の符城敷_ニ
昇菴ハ頗る癖行ある人にして躰を二階堂と云
ハ又圓窓菴と云ふ同人ハ一耳聾_トるを以て半

聾子と躰一又己か住_ニ溝に通_ル又六と呼ぶも
のありしか爲_ル又六溝と号_ス



正三焼

正三焼と云へるハ尾州名古屋に住居
も鏡屋正七と宇治屋三右衛門の兩人茶事の交
互深く相謀_リて茶室を設_ケ之_ニ同樂菴と号_ス
又借_テ陶器を作_リ左の印を款_ス時人稱_シて正
三焼と云ふ

正七ハ正齋と躰一説に三右衛門の祖ハ山城
國宇治の人不_レと云ふ何_レも文化年の人不_レ

正三 政三

蓮也

蓮也ハ尾州の法師範後柳生流兵法の
達人にして柳生飛騨守の分家不寛文年間
の頃名古屋の南隅小林と云ふ所に別荘を設け之
に移り住み故に時人小林殿と呼ぶ蓮也ハ勤
仕の暇に茶事を好み陶器を作る以て娯樂と以て
々左の印ある器物あり其作自ら是れ也
好ぶと
蓮也ハ寛文年間茶入一百枚作り瀬戸窯に於
て焼かす免れる事あり

誦蓮也 貞操 巖包

金谷

金谷ハ姓代横井と稱し尾州名古屋住

吉町と云へるに住居して洛東聖徳院宮の部下
芥の行者大寶院法印と稱し芥史と稱し
金谷ハ常に蒸村の墨法を慕ひ画に名あり時々
瀬戸に遊びて陶器を作し左の符を彫る

金谷化



日

潤

日潤ハ尾州愛知郡日比津村日蓮宗常
徳寺の住職にして高僧の号あり日潤ハ和歌を
善くし且常に茶事を好み又手造の陶器を作し
左の印を刻み
日潤ハ晩年本山身延に進みて文化三年丙寅冬
遷化す

為 一兩

無 功 菴

無功菴ハ岡谷市若南門と称し尾州
熱田の旧家にして昔々尾州家よき苗字帯刀と
許さる天保年間の人なり壯年より茶事好み三
宝戸家の門に入り有樂流の茶道に名あり自ら
樂として瀬戸窯の法に倣ひ陶器を作ると左の符
號彫る其器皆上好にして工人の風あり

五 全忠 巳 潮

廬 山

廬山ハ山田權平と称し寛保年間の人

ふり尾州愛知郡八事山(今廣路の内)の内瀧川山に深居
し樂焼を作て日常の樂としたり或時自作の蟹の香
合吹陶白丸は尚實公に献せしに公ハ大に嘉賞
せらるる名成廬山と賜ふ爾後作品に廬山の印代
捺片往々ハ事山焼と云ふ印ある器をも見る

廬 山

八 事 山 焼

士 朗

士朗ハ尾張犬山の城主成瀬家の臣久

保田某の男にして昔々年間の人なり故ありて
井上家を相續し専菴と称す俳諧を能くし其名
四方に轟けし故に之故中言芭蕉と稱したる掃
小陶器を作ると左の款を彫り又發句等を書き皆
雅作にして氣韻高し

士詞 朱橋

退

甫

退甫ハ尾州の臣井上量次郎と稱し寛政年間の人なり十村伯純の實弟にして文學に名あり茶事を善くし勤仕の余暇自ら樂として陶器を作して左の符成剛も其作伯純に似たり

破鏡

卷

子日菴

子日菴ハ尾州の臣今泉源四と稱し寛

政年間の人なり菴道に通じて其名あり嘉永の頃古梅の賀代表し自ら儀成の點茶々碗數個を作して瀬戸窯に於て燒かむ其他各種の茶器を

作して左の數成彫り其器皆高尚にして雅作なり

子

日

菴 延 春 東 雲

梅

翁

梅翁ハ尾州の臣永井五郎左工門と稱

し參政の職に進み賢良の軍あり文政年間の人なり弘化の頃退隱し春秋園梅翁と號し光後の樂として茶事を愛し又間々雅作の陶器を作して左の數成彫り

春秋園

政

石 政石ハ竹腰山城守の元職竹腰左衛門と
稱し文化年間の人なり千村伯純の実弟にして
文學を能くし又茶事に委し雪麴斎又無外菴政
石識朋等と號し往々陶器を作る其作皆雅致に
富し上好の器にして左の符あり

キ石 石

微

笑 尾

微笑尾ハ尾州の臣遠山某の女にして
て壯年より和歌を能く尾州知事郡西の口と云
ふ里に深居し異警院と號し寛政年間の人なり
間々陶器を作し樂と稱し其作皆奇にして多く左
の符あり

力

剛

南

剛南ハ姓を神谷と稱し尾州熱田の人
にして匡城業と稱し後同國愛知郡米野の里に移
り専ら茶事や愛し自ら樂として陶器を作る其
器皆上好にして工人の風ふし毎器に左の款あり

西郊田樂口

好

山

好山ハ水谷ハ古御門と稱し尾州名古
屋飯田町に住み杖木高き嘉永年間茶事之余
暇に茶事を好し遂に奇人の名を得たり人にして
又製陶に巧み是各種の茶器を作り自ら樂と
し其作雅致に富し高尚の器なり時人之欣賞
し好山焼と稱し其器に多く左の符あり

心

関 又右衛門

又右衛門ハ尾州の臣にして天明年
間の人なり勤仕の余暇茶事と好みて各あり又
常に陶器を作して樂む其作雅致にして每器左
の印あり
又右衛門ハ響園又梅廬の號あり

解樂子

大久保部也

部也ハ尾州の臣天明年間の人なり
と云ふ勤仕の余暇常に陶器を作して樂む又茶

事を好みて其名あり作る家の器皆上好にして
左の符あり又薜蘿菴と号は

毛

如

如水ハ尾州の臣寺尾右佐守と云へる
人退隱して如水と稱し破鏡菴と号は間々陶器
を作る極めて雅作なり其器に左の印を彫る

破鏡主人

一 樂

一樂ハ尾州の先臣瀧川豊後守と稱は
文政年間の人なり退隱して一樂と改免茶碗香
合の類を作し瀬戸窯に於て焼く又樂焼改換し

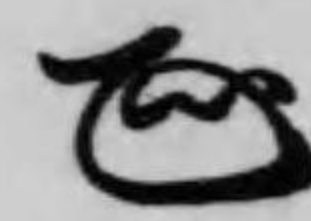
たゞ皆風雅の品ならず毎登左の款を彫る一樂ハ
澁川一益の末孫にして吾々尾州家の重職たる

一樂玉

久野助九郎

助九郎ハ正貞其律永日菴廉郷九

幡霜舎考の稱あり尾州の臣にして寛政文化年
間の人ならず勤仕の余暇に茶事を好む陶器製作
する左の印を刻に



間通斎

間通斎ハ横井作左衛門と稱し尾州

の臣にして武に長したる人ならず間々陶器を作
る左の款を刻に其作上好む共吾に稱する

間通斎 撲鉢 木老菴

龍門

龍門ハ尾州名古屋古屋材木町に住める鈴木

惣右衛門と云ふ人あり吾々材木高にして甚富豪
あり惣右衛門ハ名古屋の東南前津の里に別荘
を設け龍門亭と稱し老後の樂に陶器を作る
皆雅作にして工人の風あり毎登左の印を捺に



豊屋喜八

喜八ハ姓を若山と稱し尾州名古屋

の人ふり草結庵と號し寛政年間の際茶家あり
往々陶器を造りて左の印を刻けり



馬場多喜助 多喜助ハ尾州の臣天保より安政
年間の人あり文武に長し又景樹流の和歌に通
し又田流の茶事にもあり又志野流の香道に精
し二流亭と號し尚三筆園とも號し又娯樂の名
に陶器を作し左の印を捺けり



梶 休太郎 休太郎(一に又兵衛とあり)ハ尾州の臣にして

天保年間の人ふり勤仕の余暇茶事を好み稀に
瀬戸風の陶器を作し左の款を付けり

鴨角玄休

山本道傳 道傳の作と言傳ふる陶器に左の符
あり其器近時の作に非らば皆高尚にして自ら
古色あり



瓢箪 瓢箪ハ尾州の臣横井源五兵衛と稱す
文化年間に生れ國守齊莊慶勝の二妻に仕へ累

進んで番頭參政等の職にあつて當時有名の人
に忍々齊宗音と稱して遠州流の茶道を明に
自ら樂として陶器を作らば瀬戸窯に於て焼か
し其作皆高尚にして左の印あり維新の後専ら
茶事を楽しんで名古屋主税町に居り光を養ふ
明治廿七年某月没に年八十五



忍
忌

尊

壽院 尊壽院ハ名古屋東照宮(維新の前ハ名古屋城郭内
に鎮座ありし也今ハ
名古屋本茶屋の別當にして天保年間よ
り明治の初年
町に遷座)に至る人なり性素多藝の人にして書画を能くし
詩歌に通し尚茶事に名ありて又製陶に巧にして
頗る高尚雅妙の器を作らば左の款紋彫り時の人

之を賞し乞ひ望と云へ共多く作らざれば亦多
く興へば故に其器を以て傳ふるもの甚稀なり

印中

此印ハ
后尾州知事郡西河野
高讚寺住職慈明に
樂和
印

茗圃

慈

明 慈明ハ尾州熱田如法院ハ住職にして
後同國知事郡西河野高讚寺に轉したる人なり
慈明ハ尊壽院の門に入りて陶器を作らば左の印
款せり

樂和

爲足卷

爲足卷ハ日義と稱し尾州名古屋法

華寺町(今小川町)日蓮宗法華寺の住職にして文化
 年間の人不足常に茶事を好む退隱後名古屋の
 東南前津の里小一巻を設け爲豆巻と稱して之
 に任じ自ら樂として陶器を作し左の印は捺を
 晩年啓運光比丘と書したるものあり

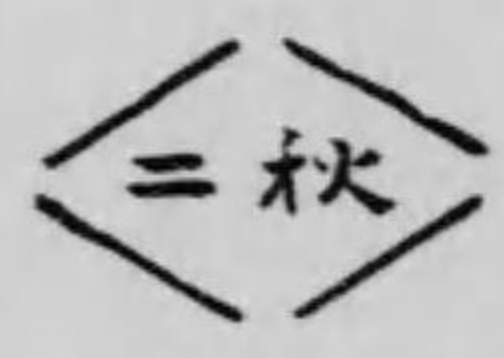
日義

長

箱 長箱ハ尾張立社の一同國海東郡津島
 に鎮座ある津島神社(祭神ハ須佐之男命にして)の神職に
 して氷室將監と呼ぶ寛政年間の人不足退隱後
 長箱と稱し和歌を能く吟又茶事を好みて其名
 あり間々陶器を作して光後の樂にあそ其器高
 尚優美にして左の印あり

秋

二 秋二ハ姓を大槁と稱す尾州津島の医
 師不足壯年より風雅を好み殊に陶器を作るに
 巧み其作頗る氣韻ありて高尚なり秋二ハ身
 く瀬戸窯に依て其器を作る晩年美濃國養光山
 に遠隱瓦山菊の画あるハ秋二六十賀の茶碗に
 して殊に光鏡嵌して画うしめしもの而已なり



秋二

秋二造

秋二

素

雪 素雪ハ通称加藤兼助景政と稱す天保
 五年九月瀬戸に生る陶祖春慶の末裔にして母々

指雲兒

龍耳收二

此亦雲二

養光

製陶を以て業とし、家父清助(清助ハ京居洞と稱し、國守徳川
茶に功あり嘉永年間ニ苗字帯刀を
許さる又慶應年間ニ陶祖奉慶の陶碑建設に際し勉めて習したるハ慶應の能く知る者に
下室に慈善に長したる人なり常に書画を愛し茶事を好む有志と稱り公園内陶祖奉慶の
碑の側に竹露庵と)
より王 継ぎ元治元年故ありて陶磁器
販賣業に轉じて山陶屋と稱し父に若らざる慈
善家に於て村吏在勤中、學事に功勞多く文部省
之に嘉賞し物品を下賜せらる素雪ハ性風雅の
人にして家事の余暇書画を愛し茶事好し殊
に種々の陶磁器を作して知友に贈る事或樂し不
以其器皆指頭の作ふ此ハ形状頗る奇にして雅
致に富み且毎器左の款あり

素雪 (素雪)

小寺省齋 省齋ハ尾州の臣にして通稱惣右
衛門と云ふ嘉永年間の人なり常に茶事を好
みて細々菴と稱し自ら樂して陶磁器を作し左の
款が刻は

如く
力

吉田鹿助 鹿助ハ尾州の臣なり維新の後前
津の里に宗辰一茶事を樂し又陶磁器を作し左
の印が款は



拓昌 拓昌ハ尾州名古屋の旧家伊藤某と稱
し現時の人なり常に和歌又茶事好みて自ら
娯樂の爲に種々の茶器を作し赤津窯に於て焼
かす其作皆高勲雅致にして左の符が款は



男某



男某

國技李輔

李輔ハ、まゝ尾州名古屋に住、現時
の人にして父ハ、充且と稱し、旧尾張藩に徴せら
る。其の逸事著名の文學者、不王李輔ハ、常に茶事を好し
山菊を愛し、花のやと辨、又瀬戸の古陶器を蒐
め、其形式等に倣ひ、種々の器物を作、自ら樂と
ふ。其作皆高雅にして、氣韻あり、毎器左の款又
符、或刻、以

花のや 子

松平東亭

東亭ハ、尾州の臣、天保年間の人、亦
常に南京漆付の磁、或愛し、遂に其法、或得て、勤仕
の余暇、青華磁器(付漆)、或焼きたり、其器物の中山水
模様、の器殊更鮮美にして、工人も及ぶざるもの
あり、別に落款あるものを見、

左の印ある陶器、其作者、年曆詳ならず、然も、其逸時
の作と思ふ可らざる古色を現、ハ、皆高尚の器に
して、工人の風、ふ、今巻末に載せて、世の識者に、實
に

一 瀬戸窯の内、橋子と稱する茶褐、色に、黒の斑、紋
ある細料にして、指頭の作、ある茶碗に



一 尾州法、庭焼、漸深井、細葉形、六寸、四、に



一 織部、細指頭、の作、ある茶碗に

11
4
375

一説に痴元と云へるハ陳元賛の辨ふると
軍しも器の形式等よと推し觀るときハ疑
ふも能ハレ

痴元

一織部袖の手鉢に

箕醒

一年代甚古からざる志野袖雅作の茶碗に

重政

11
375

終

